

予の安心立命

北尾 日大

緒言

たとひ位・高貴を極め、富・天下を壓するも、若し人にして正信正解なく、安心立命無くんば仇に慕きものである。予は宿福深厚にして熱烈なる法華日蓮の家庭に人となり、二十歳出家得度し、宗門の學林へ學び、卅二歳母校の日蓮宗大學中等部教授に就任せしより以來、自他の安心立命の爲に信心と行學を修し、教育著述調文及布教にも從事したのである。予の安心立命は予の信解行證、自行化他の進歩につれて向上發展して來た。畏れながら釋尊は八十で涅槃せさせたまひ、神武天皇は百三十七で崩御遊ばさせたまひたが、明治天皇、日蓮聖人は六十一歳でおなくなり遊ばされた。私は本年六十三、老て益々盛なりと評するものもあるも餘命長くはあるまい。よつて現在に於ける私の信解と安心決着の諸点を述べて、私の生命の立脚地を記することにした。

一、教學觀に於ける安心

法界無量なりと雖も一心と萬法との對立に過ぎない。そして一心萬法を解説して物心二面に於ける人間國家の文化を開發し向上せしむるものは教法學問である。所修の學について教といひ、能修の人について學といふ、又は能化に

約して教といひ、所化について學といふ、教と學とはただ能所の相異のみである。

世界に於ける教學は無數あるが之れを大別すれば四種となる、科學の教、哲學の教、道德の教、宗教の教である。科學は専ら自然現象、現實の事理を研究して社會人類に多大の便益と幸福とを與へ、所謂近代文化の花として必修の學問であるが、未だ宇宙の本体心靈の本質を究明せず、また若し之を惡用せば國家人類の文化を破壊することさえある。哲學、いま哲學とは専ら西洋の哲學を指すのでソクラテス、プラトーン、アリストートル等の古代哲學より、カント、ヘーゲル、スピノザ等の近世哲學に至るまで、科學以上に宇宙の本体、國家人類の本質を説明する高尚な學問であるが、未だ其の極致を顯してゐないのみならず、其の説く所高級にして一般人類を指導する上に於て欠けてゐる。

道德又は倫理の最勝なるものは支那の孔子教（儒教）である。儒教は易經の如き哲學の方面もあり、四書五經の中には宗教的要素もあるが五倫五常人道を説くのが本領である。併し其説く所が現在に止つて過去を説かず未來を説かず、人間界のみを明して天の内容も神の本質も詳説しないから、其の學説は徹底しないのである。

宗教とは宗の教である、宗とは宗旨・宗要・宗極・大宗等と熟語し、國家人類に取つて無くてはならぬ肝心肝要の教學を宗教といふので、（宗乘でいふ宗旨に對する宗教ではない）科學哲學道德以上の價值と權威を有するものであるが世人が一般に宗教と稱する内には野蠻、半開のものあり、迷信淫祠邪教と名くべきものさへある。文明的宗教と稱せらるゝものは猶太教、基督教、回教、婆羅門教、印度教、佛教、喇嘛教、道教、神道の九（若し儒教を宗教とせば十）であるが、中にも佛教、基督教、回教は世界の三大宗教である。併し現在我國では神道を加へ回教を除き、神佛基三教が日本の三大宗教である。

基督教は神の獨り子と稱せらるゝ耶蘇基督によつて開かれたる宗教で、神と子と精靈を以て三位一体とし、神に對

する信と、人に對する愛と、天國に對する望とを三大モットーとして、萬國の人類を救はんとする大宗教であるが、其の聖書に説かれたる神の觀念が不透明であり、神天地萬物造化説も亦不道理であり、人間原罪説も亦奇怪の説であり、道徳論も不完全であり、特に其の偏狹なる單一神觀は日本の國體にも衝突する、また哲學的方面も貧弱である、西洋では最勝の宗教ならんも到底東洋の佛教に比すれば宗教・哲學・道徳の三方面とも劣つてゐる。

日本の神道は皇祖天照大神を根本尊とし、其の皇孫に賜ふ所の三種の神器を至寶とし、其の萬世一系天壤無窮の神勅と、神武天皇の養正・重暉・積慶の三教を聖教とし、古事記・日本書記を歴史的經典とし、所謂萬國無比の國體を明徴にし大日本精神の淵源を教示するものなれば、苟くも生を我國に受くるものは神道を信仰し研究せねばならない。併しながら佛教の如き經典なく、宗教・哲學・道徳が佛教の如く深遠廣大に説かれてないから、世界的宗教としては妥當でない点がある。然るに明治以後の我國の政治者等は神道を單に宗教と見ず、神道を二分して神社神道と宗派神道（十三派）とに別ち、神社神道は宗教に非ず、宗教を超越してゐるものとしてゐるが、吾輩は神社神道も亦一層尊き意味に於て日本固有の宗教であると認めてゐる。この点は予と同郷の先輩故川合清丸氏の日本國教大道社（神儒佛三道鼎立）の主張と粗一致してゐる。何となれば宗教とは神と人との交渉又は佛と人との結合に外ならないからである。吾等が伊勢大廟等大小の神社に参拜して最敬禮を行ふ當所、少くとも大日本的敬神の宗教心は油然而して湧き、大和橿原神社の社頭に跪ぶるとき國民的忠君愛國の信仰が明瞭に起るからである。

佛教は印度の大聖釋尊に依つて創立され、支那朝鮮を経て日本に傳來し、日本に於て其の精髓が發揮されたものであるが、經卷は五千（舊譯）七千（新譯）餘卷あり、教法は華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の五時、藏・通・別・圓・化法の四教、頓・漸・祕密・不定・化儀の四教、大小・偏圓・權實、所謂八萬四千無量の法門があるが、佛陀出

世の本懷・衆生成佛の直道は純圓一實の眞理を説ける法華經一部八卷廿八品（漢譯に依る）である。何となれば佛教とは佛と人との交渉、人と佛との結合が佛教である。然るに阿含鹿苑の三藏小乘は云ふまでもなく、四教竝説の方等（淨土眞言三部經等）部の諸經も、般若華嚴の大乗も尙人が眞實に成佛せず、佛の實體が光顯されてないからである。所謂所化の教益（二乗成佛）全からず、能化の實事（久遠實成）が顯現しないからである。

然るに法華經を二分せば前半を迹門、後半を本門と稱す、迹門の中心は方便品、本門の中心は如來壽量品である。方便品にて諸法の實相が明されて所化が成佛し、壽量品にて久遠實成が顯はれて能化の佛の眞面目が現はれた。そして法華經は一往は在世の爲めなるも再往は滅後、中にも末代我等の爲に説かれたものである。而して滅後末代の化導は弟子の菩薩に委任して涅槃せらるゝので、末代の化導は本佛の高弟本化上行等の菩薩に付囑せらるゝのである。この付囑の事は法師寶塔に事起り、涌出壽量に事顯はれ、神力囑累に事竟るので之を起顯竟十三品といふのであるが、尤も肝要なるは迹門より本門であり、中にも涌出品から囑累品まで本化在座の八品が大事である。更に涌出品は本佛と本化との關係と本化の人格が明されてあるので肝要であり、分別功德品は如來壽量品の本佛に對する信解と妙法蓮華經を修行する方法と其の階段と人格とが明されてあるので肝要であり、法師功德品は法華經の行者の偉大なる功德が明され、世法即佛法の妙法が説かれてあるので肝要であり、不輕品は末代の行者の献身的折伏逆化の模範が示されてあるので肝要であり、神力品は本佛釋尊の妙法蓮華經が本化上行の手に渡る一大教相が明されてあるので肝要であり、特に如來壽量品の一品は以上の法門を總括する最高の本佛の無限の智慧と無限の慈悲とを内容とせる無限の生命の實相が光顯されてあるので肝要中の肝要である。妙法蓮華經の題目は廿八品に冠せられてゐるが、妙法蓮華經の説明が徹底したのは如來壽量品であるから本門壽量品の肝心妙法蓮華經といふのである。この妙法は我等衆生の總てが

絶對に歸命し歸依し渴仰せねばならぬものなるが故に南無の二字を冠し、七字の題目が成立するのである。

壽量品の肝心、本門の肝心、法華一部の肝心、一切經の肝心なる妙法蓮華經とは何ぞ、台當二家の論書に述べられたる所は多方面であるが、名体宗用教の五重玄義と、教理行果の四一に約して述べるのが要領を得る。妙法蓮華經は若し名に約せば法譬是足最勝の形式である、若し体に約せば法華乃至一切經の本体、一大法界の總体である、若し宗に約せば最勝の宗旨であり、一乘の因果である、若し用に約せば逆緣下種の密益、順緣熟脫の妙用である、若し教に約せば無上最勝の大教、末代救済の憲教である。又若し教法に約せば世界に於ける一切教學の頂上である、若し理法に約せば十方三世を一貫する普遍安當の絶對真理である、若し行法に約せば諸善萬行を總括せる一法である、若し果に約せば本佛迹佛・神明聖頂の本体又は悟り、心である。

之を要するに思想の華、文化の根である諸の教學中には佛教、佛教中には法華經、法華經中には八品、八品中には壽量品と分別品と神力品、中にも壽量品、而して壽量品乃至一切教學の心髓は南無妙法蓮華經の題目なりと信解するは予輩の教學に於ける信解と安心立命である。

但し以上は從淺、至深、捨劣得勝の法門談道であつて、若し一度法華經本門壽量品の妙法蓮華經が光顯された上は之に順應する一切の法門學説は、佛法と世法とを問はず、内道と外道とを論ぜず、之を修學し之を應用して多々益々便すべきものなることは勿論である。

二、法界觀に於ける安心

思想・佛説・實驗等を以て宇宙法界萬有を觀察するに實に無量無邊にして其の本体现象の全部を正確に認識すること

とは吾等凡夫には到底不可能に屬するが、之を總括すると既述の如く一心と萬法との對立に過ぎない。而して一心は主觀の妙法にして萬法は客觀の妙法である。そして若し之を縦に時間的に大別すると過去の法・現在の法・未來の法の三種となり、更に過去現在未來に各三世の法ありて九世の法となり、若し三世九世を一括する總法を立てば十世の法となるのである。若また之を横に空間的に大別すると地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛陀の十界となる。最惡の世界は地獄界、貪欲の世界は餓鬼界、愚痴の世界は畜生界、鬭爭の世界は修羅界、平和の世界は人間界、快樂の世界は天上界、聖者の聲を聞いて無常を感じる世界は聲聞界、自然現象を觀じて無常を感じる世界は緣覺界、献身利他の世界は菩薩界、自覺覺他極善の世界は佛陀界である。以上は大法界に遍在する別在の十界であるが、更に互具の十界と己心の十界がある。互具の十界とは地獄界所具の十界、佛界所具の十界である、其

の中文文史上に現はれ、吾人が直接見聞し得るものは人間界に於ける十界である、即ち釋尊は佛界、天親龍樹天台日蓮等は菩薩界、迦葉等は緣覺、舍利弗目連阿難等は聲聞、諸天善神等は天上界、忠臣孝子志士仁人等は人間界、蔣介石等の魔軍は修羅界、愚痴蒙昧の野蠻人等は畜生界、乞食非人賤民等は餓鬼界、極惡の罪人死刑囚等は地獄界、更に大正十二年九月一日、二日關東の大震火災の際には明瞭に地獄界が展開されたのであつた。己心の十界とは吾等が心に內在せる十界で、晴る心は地獄、貪る心は餓鬼、愚かな心は畜生、爭ふ心は修羅、平和な心は人間、樂む心は天上無常を感じる心は緣覺聲聞、利他の心は菩薩、自覺覺他・大慈悲心・大智慧心は佛陀である。

さて十界に各々十界を具して百界の世界が展開し、百界に更に各々十如是（相・性・體・力・作・因・緣・果・報・本末究竟等）を具して千の世界が成立し、千世界に更に三種世間（色受想行識）と衆生世間（動物界）と國土世間（植物界と礦物界）とを具するが故に茲に三千の世界が存在することになる、これを十界三千の諸法ともいふ。

而してこの十界三千の諸法は吾等の一念に具有するのである、これを一念三千といふ。

そしてこの十界三千の

諸法は一も固定的のものはない、一念の持ち方により、善因善果惡因惡果、因果必然の法則によつて無始無終に變化差別窮まりないからである。又十界三千の諸法は現象としては變化無常窮まりないが其本体は常住不變にして平等である。これを常同常別といふのである。常同の方面を空といひ、常別の方面を假といひ、常別に即して常同、常同に即して常別なる方面を中といふ。而して空も絶對、假も絶對、中も絶對、之を圓融三諦といひ、その觀念を一心三觀といふのである。

如此十界三千の空間の諸法は東西南北四維上下十方に於て無量無邊にして其の究極は到底吾人の認識を以て知ることは不可能である。時間の無始無終は誰人も肯定する所なるも、其の無始の時間、無終の時間は亦凡慮の及ばざる所である。

而して如此無限際の時間、無邊際の空間、即ち三世十方の一大法界の中心に嚴在して無限の智慧と無限の慈悲と無限の生命とを以て常住不斷に總じては一大法界、別しては近く世界人類を平等に恵み支配し教へたまへる主師親三德具備の最高統括尊即ち法界獨一無比尊重の大本尊は、實大乘法華本門壽量品所顯の一大本佛なりと信解するは、予輩の法界觀に於ける安心立命である。

別在の十界について詳説を要するが、それは河合日辰師の「立正安國論寶鑑」等の如くである、今は之を略する。

三、人間觀に於ける安心

十界中、人間界は上からは六番目、下からは五番目であるが、ざつと宇宙法界の中期に位してゐる。西洋の學說でも佛教の學說でも天上界の太陽が既に無數に實在するから、その周圍に在る人間世界（洋學では地球といふ）も亦無數に存在するので、之を或は三千大千世界といひ、或は無量世界と稱する。而して現在吾等が棲息してゐる世界は其の一部分で、佛教では南閻浮提といひ、世間では地球、東洋西洋、五大洲等と稱してゐる。勿論人間界といふも非情の植物礦物あり、有情の動物（畜生）も居るが、其の主体は萬物の靈長と云はるゝ人間であるから人間界と名くるのである。

一念三千の原則で、人間の本性には先天的主觀的に聖凡迷悟善惡邪正の性を具してゐるから、客觀的後天的にも聖者凡夫善人惡人悟者迷者無量の人間が存在してゐるが、之を大別すると十界に分類することが出来ることは既述の如くである。此の人間界の十界については辰師の『立正安國論寶鑑』が一番詳しいやうであるが、今は『寶鑑』にも引用せる元政上人の草山集第十八卷に記する人間の十界の詩を出すに止める。

五逆及ヒ十惡 ホシイマ、縦ニノ 心 ヲ 毀 ニ 大乘 一 荷 フ 恩 ヲ 不 レ 思 レ 報 セ 總 ナ 無 ス 佛法僧 ヲ

（地獄界）

不信 ニ 不 レ 孝 セ 親 ニ 貪 レ 他 ヲ 集 ヲ 歸 レ 我 ニ 邪見詭曲ノ心 曾 テ 無 シ 知

（餓鬼界）

痴驗 ニ 不 レ 知 ラ 耻 ヲ 念念耽 ニ 五欲 ニ 利 己 絶 レ 憐 レ 他 ヲ 貪 レ 多 ヲ 無 シ 厭 足 一

（畜生界）

念念雖 モ 修 メ 善 ヲ 猜疑每 ニ 滿 ツ 胸 ニ 見 レ 賢 ヲ 亦 タ 不 レ 愧 高 己 欲 ニ 人 ノ 從 一

（修羅界）

至誠勤 ニ 五常 一 深信崇 ニ 三寶 一 未 レ 忘 ニ 世樂 ノ 心 ヲ 輪 ニ 轉 ス 八苦 ノ 道 ニ

（人間界）

習^テ禪^ヲ修^シ十善^ヲ 齊戒思^ヒ無^シ邪^マ 只^タ爲^ニ希^フ天樂^ヲ 未^レ離^ニ三有^ノ家^ニ

(天上界)

四諦十六觀 修^テ得^テ入^リ無漏^ニ 如^シ摩^ク羅^ヲ不^カレ顧^ミ群^ヲ 寧^ニ願^ニ師子吼^ヲ

(聲聞界)

因緣旋火輪 飛落夢中^ノ身 雖^レ得^ニ自然慧^ヲ 不^ニ曾^テ慕^ヘ化^ス人^ヲ

(緣覺界)

我^ガ心^ハ是^レ衆生^ニ 我^ガ家^ハ是^レ法界^ニ 更^ニ入^リ重玄門^ニ 捨^レ身^ヲ亦^レ不^レ悔^ヒ

(菩薩界)

萬境是^レ中道 一心沒^ニ町畦^ヲ 深^ク知^リ諸法^ノ妙^ヲ 立^チ地^ニ得^ニ菩提^ヲ

各界に於ける人物の實例は前の法界觀の下に略舉する如くであるが、此中佛界菩薩界乃至吾等の模範とする聖賢は我國では政治方面で天照大神、神武天皇、神功皇后、應神天皇、桓武天皇、聖武天皇、後醍醐天皇、聖德太子、藤原鎌足、菅原道實、和氣清麿等。宗教方面で傳教大師、日蓮聖人、日像上人、日親上人、日朝上人等。軍部にては楠正成、加藤清正、東郷平八郎等であり。外國にては印度の釋尊、阿闍世王、天親龍樹、阿育王等、支那の堯舜、文武、周公、孔子、孟子、諸葛孔明、文天祥、天台妙樂等、猶太の基督、希臘のソクラチス、獨逸のルーテル、カント、米國のワシントン等であらう。

然るに平凡なるもの、邪惡の人間にも本來佛性を具するものなれば、精々善知識に遇つて佛法を聴き、信心と學問と行道とを修して本有の佛性を開發せねばならぬ。轉迷開悟離苦得樂は死後よりも生前に必要である。一念惡心を起せば獄卒杖を振ひ、一念善心を生ぜば諸佛蓮台を傾く。惡因は必ず苦果を感じ惡道に墮つ、其の極点は地獄である。善因は必ず樂果を招き善道に昇る、其の極点は佛界である。苦果は誰人も好まざる所、樂報は萬人の欣求する所である。心ある人間、求道の人、須らく正法によつて正信に入り、更に正智正德正勇を獲ることに勇猛精進せねばならぬ。

凡そ人生當面の目的は種々様々であるが、最高の目的は自らも神になり佛になり、他をしても神となし佛となさしむるにある。向上の志ある大丈夫須く小成に甘んじてはならない。

さて話は前に歸るが、現在の人間世界は何時頃成立し、現在如何に變化し、遂に將來は如何になるかといふに、先づ西洋の學說では現在の地球の形成期は約四億四千萬年以前にありて無生物時代である。約一億六千萬年以前に初めて生物出來、約二千萬年以前に初めて人類出生す、云々と説ひてゐる。

佛教では物の變化を生住異滅、人間の變化を生老病死、世界の變化を成住壞空の四劫で説明する。成は成立時代、住は相續時代、壞は破壊時代、空は空虚時代である。現世界成立時代は西洋の學說以上に古いやうである。そして其の住劫時代に更に進化時代と退化時代とがあり、現在は退化時代で、假ひ物質文化は進歩すと雖も、地球も人間も退歩の過程にあると説かれてゐる。故に出來得る限り人間の文化を發展さして世界そのものゝ退化を減少せねばならぬといふのである。委しくは茲に述べがたい。

尙一言人間の生死のことを述べると、凡そ萬物は其の當相は時々刻々に變化し無常なるも其本体は常住にして不變である、人間も亦然りである。肉體も心靈も其の相用は常に變化し遂に死滅の期あるも、其の本体は常に不變にして生死を超越してゐる。しかも無形の心靈の不死常住は有形の肉體の如くならず、それ自体を全ふして不死である、肉體は焼けば骨となり灰となり、埋むれば土となる、心靈は一時死によりて肉體と離れ、その作用を停止するも更に若干の時間の後、新しき母胎に宿りて十ヶ月の後再び人間となつてくるのである。そして生前に於て畜生の如き生活をするものは必然的に牛馬犬猫の胎内に宿り、普通人間の生活をするものは再び人間に生を受け、同じく人間に生を受けるものゝ中にも、信心ありしものは信者の家庭に、不信心のものは無宗教の家庭に、學問を好めるものは智者と生れ、殺生を好めるものは短命多病と生れ、慈悲心ありしものは長命のものと生れ、瞋恚の人は醜くき容貌を受け、貧

欲のものは貧窮者と生れ、施しを好むものは富者と生れ、人を敬ふものは貴人と生れ、人を輕んずるものは下賤のものと生れ、心の弱きものは多く女人と生れ、心の強きものは多分男子に生れ、人を殺害せしものは人に殺害さるゝ果報あり、不品行なるものは夫婦間不和の果報がある等である。而して其の轉生の期間は一七日・二七日・乃至・五七日・七七日であるといはれてゐる。葬式は勿論普通七日・七日の追善供養は専ら肉體より放たれたる亡靈を善導し向上させる目的に外ならない。その死より生に至る間を中有といふ。但し極善極惡のものには中有がない、極惡のものは死とともに墮獄し、極善のものは直に成佛するからであると説かれてゐる。

故に一口に追善菩提の法事と云ふも七七四十九日中陰の弔ひが一番肝要である。一周忌以後の追善は多分追懷のため謝恩のための意味が強いことになる。但し茲に疑問があるのは、既に轉生せるものに對しては追善の必要がないではないかといふのであるが、吾等は凡夫で轉生未轉生が不明なれば、兎に角追善菩提を修すれば可なりである。そして若し既に轉生せるものに對する回向菩提の功德は一轉して其の再生の人の爲に現世安穩の祈禱になり、其の功德は何れにしても効果はあるとされてゐる。例へば人あり遠方に遊學せる子の病氣療養費として金若干を送金す、若し病氣未だ快癒せざれば正しく治療費となり、若し快癒後なれば學資に轉用せらるゝが如きであらう。位牌墓石等に對する觀念亦之に準じて知るべきである。

但し以上は凡人について云ふ、佛菩薩神明等に對する法要回向は、救濟善導の意味でなく、報恩感謝、追慕追懷、法脈相續等の意味に外ならない。

又更に現在の世界特に日本に對する觀念としては、要するに現在の世界各國は概して物質的文化は進歩するも精神的宗教的文化的文化は退歩してゐる。されば各國とも口に筆に正義人道を唱へざるに非ざるも實際は縱横に權謀術策

を弄して所謂優勝劣敗弱肉強食、地獄餓鬼畜生修羅の思想で生活行動を爲してゐるやうである、豈に啻にソ聯英米佛蔣國民政府のみではあるまい。現在の世界の情勢では到底、基督教、回教、神道の神の國も佛教の佛の國（淨土）も永久に實現せず、眞の平和は東洋でも西洋でも世界に於ても斷じて望まれないことは誰人も異議がないであらう。然らば如何にせば眞の和平が獲られるかといふと、これは種々の観点から論ぜらるゝが、手取り早い所では世界の總てを正しく教へ正しく指導し正しく支配し正しく成敗し得る絶大なる智慧の力と慈悲の力と經濟の力と軍隊の力とを有する國家國王が勃興することを第一條件とするであらう。智慧の力とは思想學問の力、慈悲の力とは宗教道德の力、經濟の力とは物質的財力、軍隊の力とは武力である。日蓮聖人の觀心本尊鈔に「此四菩薩（本化）折伏ヲ現ズル時ハ賢王トナリテ愚王ヲ誡責シ、攝受ヲ行ズル時ハ僧ト成リラ正法ヲ弘持ス」とあるは味ふべき御文である。

さて此の正しき意義に於ける世界統一の天業を企圖し成就すべく智慧・慈悲・經濟・武力の四大力に於て完備せる國家は現在に於ては見當らない。唯我大日本國が比較的に此等の力を備へんとしてゐる。中にも 天皇陛下を直接に大元帥として頭に頂ける陸海空の軍隊が優勝である、更に帝國一致、盡忠報國の大和魂が優れてゐる。この軍人精神日本思想の優勝の根本原因は、神道の所説萬國無比の國體精神と、萬教無比の日本佛教及儒教の感化によりて三千年二千年來養成し練へ上げたものであらう。特に忠君愛國の精神は神道及儒教の教ふる所、大慈折伏、大悲攝受、不惜身命七生報國の信念は専ら大乘佛教の教ふる所である。この觀念を直接我國の官民に教示せられたる聖者は、前に聖德太子、傳教大師等あり、後に日蓮聖人、日像上人等がある。近く田中智學、川合清丸先生等の如きも其の流れを汲める人であらう。

日本は國體と宗教と武力とに於て大と稱することを得るも、領土は狭小である。七十年前政治に於ては明治維新の

大業を斷行し、明治廿七八年の日清戰爭、卅七八年の日露戰爭、大正時代の世界戰爭、昭和六、七年の滿洲事變、特に今度の支那事變に大なる犠牲を拂へるも國運愈々發展し、新東亞興隆の聖業も近きにあることは殆ど疑を容れざる所なるも、國際外交の智識、經濟の力、科學文化の力、堅忍持久の思想等に於ては尙未だ英米等に及ばざる所があるといはれてゐる。

今や東に日支事變ありて皇軍の向ふ所百戰百勝、蔣の魔軍將に壞滅せんとし、王兆銘を中心とする支那自体の平和運動擡頭して支那新政府の樹立も本年を出でんとし、東洋の平和克復期して待つべしと雖も、昔は支那日本と對立して東洋の三大國であり、佛教法華經の淵源地たる印度は尙依然として異教徒英國の殖民地である。印度は文化的に宗教的に日本及支那滿洲と密接の關係ある國、早晚英國の魔手より脱せしめて正義日本の勢力範圍とすべきこと恰も滿洲及支那の如くなさねばならぬ。然からざれば東亞新興は完全に成立しないことは勿論、従つて世界の永遠の平和は期せられないのである。

若し將來日本の力に依つて日本と滿洲と支那と印度と心からの同心協力が成功し、更に獨ソ伊其他の協力が出來たならば英米佛も恐るゝに足らざるのみならず、所謂聖教的世界統一の大業は成就し、大日本天皇は少なくとも精神的に世界に君臨せらるゝものと堅く信ずるのである。

如此東亞の統一、世界の統一は勿論百年、五十年計畫であつて、現在の日本としては政府も國民も、政治家も教育者も宗教家も其他各階級の人々、男女老若とも、大なる覺悟と、大なる研究と、大なる修養と、大なる試練と、大なる努力と、而して各方面に於ける大なる改革を要することは勿論である。

私の人間觀に於ける信解と安心立命は粗ぼ斯の如くである。

四、修行觀に於ける安心

次に聖教に依りて、吾等人間が理想する佛又は神に成るために要する信心行學に於ける領解安心を述べやう。

成佛の爲の修行の方法としては、本經は分別功德品の後半四信五品段、特に五品の教相に説かるゝ所が一番整備し祖判にては諸法實相鈔の末段に、

一圓浮提第一の本尊を信じさせたまへ、相構へ相構へて信心強く候て三佛の守護を被らせたまふべし。行學の二道を勵み候ふべし、行學絶えなば佛法はあるべからず、我も致し人をも教化候へ、行學は信心より起るべく候。若し力あらば一文一句なりとも語らせたまふべし。

とあるのが尤も能く整備してゐるやうである。

本經に於ける修行法は五種修行と十種供養と三學六度とを出でない。そして此の法華經の行法を實行された最高の聖者が宗祖大聖人であるから、法華經の行者日蓮ともいふのである。よつて實相鈔の外、祖判至る所に述べられてある行法は本經に準據されたものである。今本經祖判に依つて本宗の修行を考へて成佛の安心を決着すれば大略次の如くである。

さて本經祖判に教へられたる修行法は數多なりと雖も受持信心を以て根本とし肝要と定めてある。受持とは「信力の故に受け、念力の故に持つ」で受持即ち信念又は信心又は信仰又は信である。

既に信といふ、信する者と信ぜらるゝ者即ち信心の對象の二つが必ず對立せねばならぬ。信する者は吾人で、信ぜらるゝものは佛實法實僧實、神、聖賢哲人等無數にあり、従つて吾等の信する心も種々様々であるが、即身成佛を最

高目的とする根本信心は、序品より勸發品に至り、建長五年の朝たより弘安五年の夕に至るまで妙法蓮華經に南無する信心、即ち南無妙法蓮華經の信心と確定してゐる。信心それ自身が南無妙法蓮華經と一定せば、其の對象も亦自ら南無妙法蓮華經であらねばならぬ道理である。この道理の通り、如來壽量品中心の法華經一部八卷廿八品中一番尊いものは總の題目である、妙法蓮華經の題目、五字の一大祕法が法華經の本尊で同時に一代佛教の最高唯一の本尊であるのである。

祖判に之を見るに矢張り本經の如くで、釋尊、法華經、上行菩薩、天照大神、八幡大菩薩、大日天子等宗祖自身が尊敬され信仰された佛法僧又は神は少なくないが南無妙法蓮華經以上の御本尊は見當らない。更に宗祖自作又は感得の本尊形式と傳へられるものには南無妙法蓮華經式と南無妙法蓮華經十界勸請式と、釋尊式と一尊四士式とがあるが、十界は妙法の光明に照られて本尊果海に入れるものにして本來よりの本尊に非ず、つまり傍尊であるし、上行等の四士は勿論本佛釋尊の脇士であつて本尊の主体ではない。故に此の四種の本尊様式もつまりは妙法本尊と本佛本尊の二種に外ならない。然るに此の二種の本尊様式中何れが御正意であるかといふと、妙法本尊が正意であらうと思ふ。何となれば確實なる宗祖直作の御本尊中最大多數の大曼陀羅は悉皆南無妙法蓮華經が中心總尊となり、一幅も南無釋迦牟尼佛が中尊になつてゐるのは無いからである。

南無妙法蓮華經の本尊に對して南無妙法蓮華經の信心を爲す。境智冥合、能所一体、函蓋相應、これ吾等の宗門の根本の信心本尊である、

さて信ずる本尊の南無妙法蓮華經とは如何なるものであるか、若し名に約せば法華の題目、本佛の御名、十界尊の總稱である。若し體に約せば、一部の心、一切經の總要本佛の智慧又は本佛それ自體、本化の魂魄、天地の神明三世諸佛の御心、天地の眞理、文化の根本元素である。若し宗に約せば本果妙の本尊である。若し用に約せば逆緣下種の

本尊、順縁熟脱の本尊である。若し教に約せば萬世不易の本尊、一切法界普遍安當の本尊である。若し又佛又は人に約せば本佛心又は本佛自体であり。若し法に約せば根本法、一切經の心髓、一部八卷の歸趣である。若し僧に約せば本化日蓮聖人其他聖哲の精神である。由是觀之に南無妙法蓮華經本尊は一往は法本尊のやうだが再往は五玄具足の本尊、人法一体の本尊、三寶一体の本尊である。而して再々往は五玄では體玄義、人法では人、三寶にては佛寶を正意とすべきか、何となれば熱烈なる信心の對象たる本尊は大慈悲大智慧大神力主師親三德の人格的本佛が尤も力強くあるからである。

日蓮聖人の宗義に於て三大祕法は本化別頭の宗要と稱せらるゝが、第一の本門本尊は報恩鈔三大祕法鈔とも壽量品の教主釋尊になつてゐるのは此の重ではあるまいか。

更に一義あり、佛・法一体中、開目鈔、三大祕法鈔、法華取要鈔、四菩薩造立鈔、等は佛を表として法を含ませ、本尊問答鈔、日女御書、大曼荼羅等は法を表として佛を含ませられたものか。更に一義あり、佛滅後二千二百二

十餘年又は三十餘年一閻浮提の内未曾有の大曼荼羅の表面を拜するに中心尊又は最高統括尊として中央に南無妙法蓮華經と大書してある、そして此絶對本尊体内の諸尊として十界の聖者が羅列してある中、常に其の最上席に位するものは南無釋迦牟尼佛と定まつてゐる、最上首は其の界を代表するもの、よつて中央尊の題目か總の本門本尊、絶對的本尊なるに對して、本佛釋尊は別の本門本尊、相對的本尊と分別する義である。

更に大曼荼羅式と一尊四士との交渉如何といふに、二種一体の義に約せば、一尊即題目であると同時に釋迦多寶等の佛界を含み、四士を以て九界尊を攝する、二種は相異体同と拜せらる。若し二種異体とせば、一尊四士は第二義的で、此の式には總尊の意義が顯はれず、佛界と九界と別尊のみの本尊式と見るより外はない。

尙私見によれば當家の本尊は大曼荼羅で十分であるのに、何故に別に一尊四士の形像式を立てられたかといふと文字曼陀羅では國語を異にする外人や小兒などには認識されがたく信じられ難い、よつて誰人が見てもすぐ信敬せられ得る形像式を立てられたのではあるまいか。例せば新聞雜誌書籍等の説明には文字で可なるも適宜に繪畫を挟むことが讀者を喜ばせるやうなものである。

要するに法華經の本尊、日蓮聖人の本尊、吾宗の本尊は南無妙法蓮華經を第一義の本尊とすることは動かぬ所と信じ、之に對して金剛の信仰猷身的の信心を捧ぐることに肝要である。さて第二義の本尊としては勿論教主釋尊又は法華經一部であらねばならず、更に第三の本尊としては能弘の大導師宗祖日蓮大聖人であらねばならず。更に當分の本尊としては、天体にては大日天子、地上にては〇〇、日本國神としては天照大神、本宗の聖廟では祖廟、本宗の寺院では身延山、府縣市町村にては知事、市長、宗門では管長、寺では住職、一家にては主人が本尊である等の義成立し、更に諸法融通の觀心に約せば五大本尊、法界本尊、一切衆生本尊、己心本尊、自己本尊等無量の本尊義が成立するが、宗教宗旨の本尊としては、法に約すれば南無妙法蓮華經本尊、人に約すれば久遠實成釋迦牟尼佛本尊であつて其の様式は南無妙法蓮華經十界勸請式で表現するのが妥當であると信ずる。而して他は悉く傍尊末尊といはねばならない。然るに古來の日蓮本佛本尊義、近時の〇〇〇〇義等は不相傳の僻見であることは勿論である。

さて大曼荼羅本尊に十界具足廣式と諸尊省略式と一遍首題要式とがある。これは行學朝師の會通せらるゝ如く廣式は妙解の本尊、略式は妙行の本尊、要式は妙證の本尊となるであらう。證りの本尊としては一遍首題に自ら諸尊具足せば、別に煩はしく之を形式に現す必要がなく、悟道の上根者にとりては要の一遍首題にて可なりであらう。行の本尊としては、其の模範者としての四聖及國神等を要して提婆龍王等の諸尊は必ずしも用としないであらうこれは中根

の行者に親しいであらう。妙解の本尊として中尊の内容を解説し、中央總尊と傍列別尊とを分明にし、別尊十界を委細に表現するの必要あり、これは下根の信者に親しいであらう、末代の最大多數は下機下根である。宗祖及先師の本尊が多分廣式を用ひてゐられる意趣蓋し是であらう。

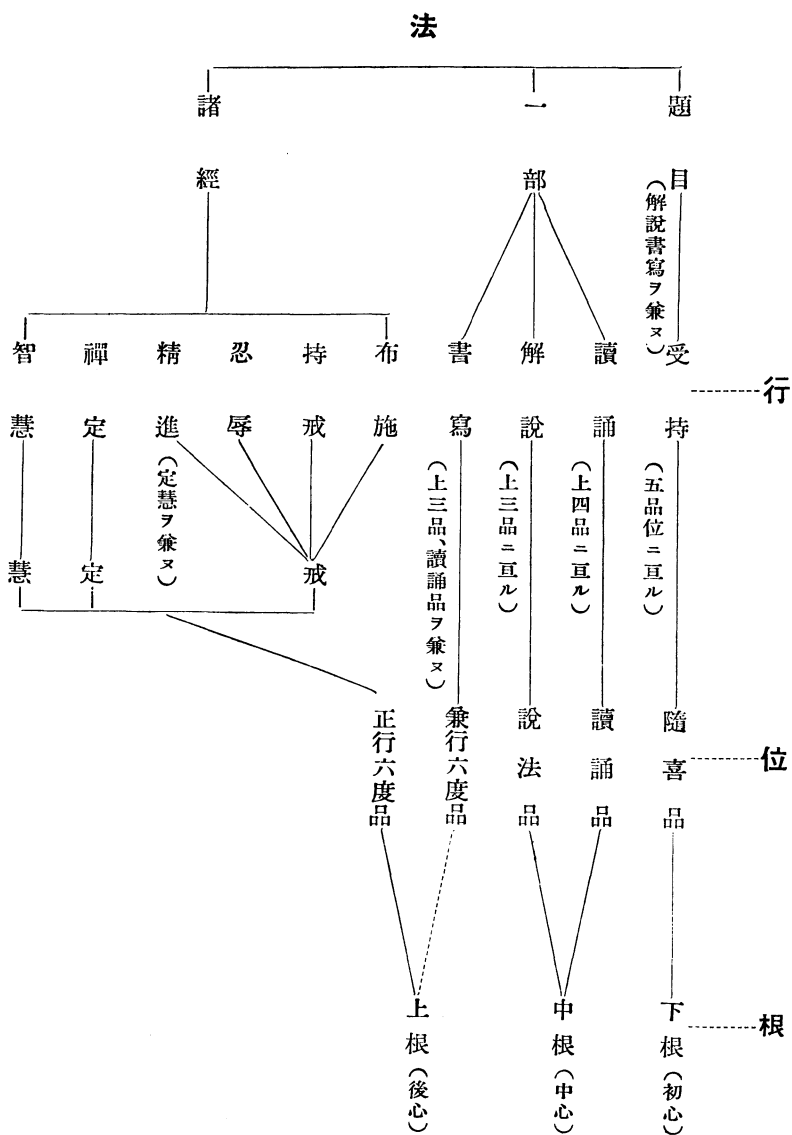
尙妙解十界の本尊に對する觀念については種々の觀點あらんも、要するに仰で中央の南無妙法蓮華經を凝視しては南無は吾等の熱烈なる至誠金剛の信心、妙法は天地の精宗法界の神靈たる本佛の全体、蓮は本佛の果徳、華は本佛の因行、經は不動の結語。要するに南無妙法蓮華經即ち三世常住法界周遍の一大本佛に一心歸命せば之と一体不二となりて即身成佛することを得と確信する。次に南無釋迦牟尼佛、南無天照大神、日蓮の文字等を拜しては、即ち生ける佛、神、大聖人なりと確信し、其の冥加を祈るとともに、其の一大靈格に一如して、日に夜にこの生活をなし、又聖の如く社會國家世界人類の爲に盡力せざるべからずと念じ、それには正しき信心を増進して更に行學の二道を勵むべしと思想を運すのである。

尙本尊義には辨すべき多くの問題義門が残つてゐるが之を略し、最後に勸請に關する要件を一言するに止めやう。本尊は神聖にして犯すべからざるもので、其の勸請法は尤も正格、嚴肅、清淨無垢であらねばならぬ。然るに寺院の本尊を見るに、多くは中央の題目の形小に失し諸尊の勸請宜しきを得てゐない。在家の佛壇に至りては見るに忍びざる非法のものが多數である。吾等は本尊佛壇の改革を叫ばねばならぬ。

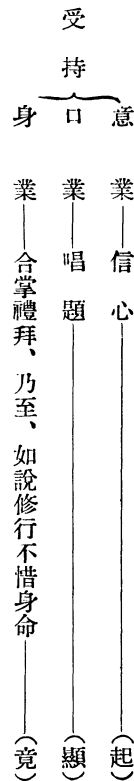
次に正しく信行について言へば、本宗の信心とは南無妙法蓮華經の本尊を信じて、吾等の心身が妙法蓮華經に一致合休せんと欲求する心理狀態をいふ。既に言へる如く南無とは信心なり、妙法とは本佛それ自身の全体なり、蓮は本佛の果徳なり、華は佛の因行なり、經は常住不動を意味する。故に吾等が一心強盛に南無妙法蓮華經の題目を心念口

唱して本尊の南無妙法蓮華經對し、之と一致合體せば速に即身成佛するのである、信心成佛受持成佛とは是である。受持信心は成佛の正因にして成佛は其の結果である。

本經に行法として五種の修行（受持・讀・誦・解說・書寫）と十種供養（華・香・抹香・塗香・燒香・瓔珞・幡蓋・伎樂・衣服・合掌）と三學（戒・定・慧）六度（布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧）等が說かれてあることは既に一言した。受持の一行は直接妙法蓮華經の本尊を信念する行にして成佛の正因なるが故に上根下根を擇ばず、初心後心俱に修せざるべからざるも、讀誦乃至三學六度等は正因の信心を培養し助長するための傍縁に外ならざれば其の用不用は時機の宜しきに從はざるべからず。又初心下根は一部讀誦尙堪へざる所、況や三學六度等に於てをや。今本經分別功德品に依つて本門の行者の階級竝に行法等を圖示せば次の如くである。



成佛の爲の法華經主義の修行の中、受持の一行は成佛の正因として尤も大事なれば更に少しく詳述せねばならぬ。
先づ三業受持といふことを知らねばならぬ。



要するに本宗の受持は信心に起り唱題に顯れ實行に竟らねばならぬ。受持を三業分別する場合には信心と唱題とを分けるが普通は信心といへば唱題を含み、唱題といへば信心を含んでゐるのである。故に信唱一致に約せば信心正因といふも唱題正因といふも同じやうであるが、本宗の受持は意業の信心正意か口業の唱題正意かといふと古來信心成佛義、唱題成佛義と二説あるが、予輩の領解安心では唱題よりも信心を正意としてゐる、何となれば唱題無きも(啞者、大病人、口に病あるもの、職務激忙の折り、或る事業事務の爲め障りあるとき)信心さえ正しければ成佛可能なるも、いかに一生百萬の唱題を行ふも正信なきものは遂に成佛不能なるが故である。然るに本經には口業に約して受持を勧めたまへる所は殆ど無きも、祖判には五品鈔、報恩鈔等唱題に約して信心を勧めたまへる所多きが故に、本宗の成佛は信心よりも唱題を正意となすべしと斷ずる學者あるも、私見は五品鈔も報恩鈔も既に南無妙法蓮華經を唱ふべしとあり、南無とは猷身的信心のことなり、信心の上の唱題を勧められたものと拜する。顯本法華宗の受師は信心正行唱題助行と立て、信を非常に重く置いてゐられる。此説は更に考ふべしであらう。私見は唱題の行は内容の信心を口業を以て表現して信心を忘れず、音に忘れざるためなるのみならず、之を修養し撃動して更に不惜身命如說修行の本格的實行に進む激勵の聲であり、又沈黙の信心は一應自行に止まる、之を化他に及ぼすべく宣傳的に聲も吝まず唱ふるの意

味があらう、若し大鼓木柀を合打するは更に唱題を激勵するためである。更に一義あり、末代の頑夫愚婦、幼稚の子女、野蠻未開の徒輩をして正信に入らしむることは困難なり、よつて比較的易修易行の口唱に約して成佛を勧められた意味もあらう、所謂心理學上の形式より反應する内容の擴充なるものであらう、方便より眞實への下機誘引の方法であらう。但し正信なき唱題は成佛の正因にならざれば、能化者はこの道理と法門を吞込んで精々眞の唱題の信者を養成するに努力せんことを要する。所謂信男信女と稱するものゝ大部分は正信無き唱題であらう。私の現在居住してゐる鳥取縣あたりでは眞の日蓮法華宗の僧俗は曉天の星の如くであることを遺憾としてゐる。

次には受持に單一受持と具足受持とあることを知らねばならぬ。これは陀羅尼品から出た義で、單に題目だけ持ち得る初心の受持と、題目受持の上に一部乃至諸行を兼行し得る後心の受持とで、後者が勝れてゐることは勿論である。單信無解又は但信無解と有信有解との優劣また準知すべきである。

之を要するに本經には通じて五種十種三學六度の諸行を説かるゝも、別しては受持の一行を以て成佛を決定せられ祖説亦一ならざるも特に信心成佛唱題成佛を主張せられたるは、行に約すれば諸善萬行中信心唱題尤も肝要であり、機に約すれば末代の下根は諸行に堪へず、一行によつて精神を統一するが得策であるからである。但し比較の後心又は後心たらんとする者は進んで讀誦解說等を修し、更に宗教家として教化の大任に衝らんとするものは更に進んで三學六度をも分に修せねばならない。

故清水梁山氏の讀誦謗法論の如きは初品を知つて後品を知らず、受持一行に囚はれて諸行に進むことを忘れたる愚論に過ぎず、田中智學氏の三學無用論の如きは初二三品に滯りて後二品を否定せる淺見である。

尙實相鈔の信心と行學二道と説法とを辨ずると。信心とは一闍浮提第一の御本尊を信じて題目を唱ふるを行を信心

といふのであるから、信心も行學の行の内に攝するといふよりも行の根本であるが、信は一番肝心の行なるが故に特に別出されたのであらう。正しく行とは讀誦解說三學六度等の諸行であらう。學とは學問研究であれば、實に行道の研究のみならず、廣く佛法世法、教相觀心の學であらうが。之を大別すれば宗乘餘乘となり、宗乘を以て正意とすることは勿論である。但し祖師御在世に於ては法華經の研究が宗乘であつたであらう。祖師滅後に於ては本經の外に祖書學も宗乘となつたのである。

「力あらば一文一句なりとも語らせたまふべし」とは、特に化他傳道の急務を學匠最蓮房へ對して勧められたものである。

以上、行に關する談道は三大祕法中にては本門題目の下の法門である。三祕は古來宗教の五綱に對して宗旨の三祕といふも、實は釋尊の宗旨、一切經の宗旨、法華經の宗旨、日蓮聖人の宗旨、法華宗の宗旨、吾等の宗旨は要するに唯一乘の法のみありて二もなく三もない筈である、それは一大祕法の南無妙法蓮華經である。そして三大祕法は一大祕法より開かれたる行門に於ける要法であらう、故に本門本尊本門題目といふも、たゞ其の法体を説明されただけではない、日本乃至全世界の人類一同に之を本尊とすべし、日本乃至漢土月氏一閭浮提に人ごとく有智無智をきはす一同に他事をすてゝ南無妙法蓮華經と唱ふべし、と其の本尊信心の實踐躬行を勸めてある。本門題目の下には只信心唱題即ち受持の一行のみ勧めたまへるは本門題目の信唱が實に即身成佛の正因であるからである。決して讀誦解說等の諸行を否定されたのではない。それ故に「他事を捨てゝ」の他事とは蓋し三義があらう、一には宗に約して他宗の信行を捨てよとであらう、二には行に約して專修正行の談道であらう、三には機に約して下機下根單信無解一向信心の重であらう。

次に本門戒壇は報恩鈔等の諸御書には只名目を擧げて内容を秘したまふ、ただ御入滅の前年弘安四年四月八日太田金吾殿に對する教書のみに豫言的に其要領を明して委細は秘してゐられる。

戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大祕密の法を持ちて、有徳王覺徳比丘の其乃往むかしを末法濁惡の未來に移さん時、敕宣竝に御教書を中下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者歟、時を待つべきのみ事の戒法と申は是なり。三國竝に一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して踏給ふべき戒壇なり。

とである。顯本宗の受師鑑師、日蓮宗の田邊師等は三祕鈔僞作論者で王佛冥合事壇建立を一笑に附するのであるが、既に三祕は宗祖の確説である以上、如何に事未來に屬する法門であつても、名目のみで一向に内容を明されざる筈はない、御門弟などには弘安四年を待たずして在島中既に語られたと想像する。何となれば戒壇は既に小乘權大乘迹門の戒壇が印度支那日本に建設せられてゐるから、それ以上の使命と權威を持つる本門の宗教にそれが無用である筈はない。よつて私は三祕鈔のあることを幸とし之を眞書と信ぜんとするものである。そして本尊は成佛の大事のための信仰の對象であり、題目は信仰それ自身であり、戒壇は信仰本尊の宗徒の團結力と教化力によつて將來に實現すべき一大理想境であると信ずる。

そして其の建立せらるべき時機は、王法即ち國王を首腦とする國民の思想が佛法の眞理に一致するやうになり、佛法の眞理が世間の諸の法と冥合するやうになり、結局上は國王より下は庶民に至るまで三大祕法の妙宗の信者となられた時に、畏れ多くも國王の敕宣の下に建立せらるゝ國教的一大道場であるのである。王佛冥合王佛一乘といつても直ちに王法が其儘佛法といふのではない。佛法は能化、王法は所化である。

そして其の場所の最勝の地とは大日本であることは神國王御書で察せられるが、日本の中では何れかといふと、富士山説、富士山大石寺説、富士山北山本門寺説と身延山説とがある。私も一時田中智學氏に依り富士山説を採つたところがあるが、後に富士山は休火山でありと聞き、又大正年間登山して實地を見分し、山としては最勝なるも、築壇の場所としては不適當なることを認めた。然らば何所かといふと宗祖棲神の靈山身延ではなからうかと考へる。

宗祖延山隱棲については學者種々の説を爲すが、私見にては近く新宗教の中心總本山創立のためであり、遠くは本門戒壇建立の爲であらうと拜察する。弟子の教育のため、聖默然の化導のため等といふ如きは一義に過ぎないであらう。三度諫めて容れられざれば山林に逃るとは一應當面の理由に過ぎないことは勿論である。

五、成佛觀に於ける安心

本宗の所期、三祕の目的は人に約すれば即身成佛で、國に約すれば娑婆即寂光である。

所信の本尊は唯一なるも、能信の人の因行に利鈍上下等あるが故に即身成佛の結果も一ならない、所謂五品の階級六即の次位等がある、往て分別功德品と法師品と壽量品御義と得受功德法門鈔等を往て見よ。娑婆即寂光亦準知すべきである。但し末代の通機としては、初隨喜品の成佛、名字即の成佛多數を占め、名字即單信無解の成佛より出發せねばならぬも、決してそれで行止りではない、觀行即乃至究竟即の大果を期せねばならぬ。名字即の成佛は成佛の起点にして妙覺の成佛は其の終點である。故に三世諸佛總勘文鈔にも「名字即より即身成佛す」とありて「名字即に限る」とは無い。故に吾等能化を以て任じ向上進歩を期するものは、少くとも初二三品の小成に甘んぜずして後二品の大成に進まねばならぬ。祖師大聖人は吾徒法華日蓮の徒の最高模範の行者である、然るに名字の日蓮、理即の如き日

蓮云々と申されしは一往末代の通機に代つての謙辭のみ、決して聖人の眞面目ではない、聖人の本領は下山鈔の「釋尊より大事の日蓮」、撰時鈔の「閻浮第一の聖人」、顯佛未來記の「佛の如き聖人」、本尊鈔の「高貴の大菩薩」、諫曉八幡鈔の「日の如き聖人」、萬年救護の本尊の「上行の化身」等と云へる方が宗祖の本領である。

佛説を以て祖師を見るに末代に於ける後心の正行六度の行者は宗祖以上の人は無い。宗祖は實に受持に於て日本一であると同時に讀誦に於ても解説書寫に於ても第一であつた。更に布施慈悲に於て、持戒道徳に於て、忍辱忍耐に於て、勇猛精進に於て、一心禪定に於て、智慧學問に於ても最爲第一の行者であつた。「法華經の行者日蓮」の稱は決して名字即の如き低級の信者を意味するものではない。

更に一言補足する。三大祕法中、即身成佛は境の本門本尊と智の本門題目とが冥合する所に實現し、娑婆即寂光は更に本門戒壇の建立せられたるとき實現するであらう。但し今は事の戒壇でいふ、若し理の戒壇若くは一分の事壇は本尊に對して正しく題目を唱ふる所即是道場の意味で現はれる。若し夫れ戒法には總戒と別戒あり。總戒は信心にして、別戒は開顯の三聚淨戒等なり『護法救世妙道明鑑』等往て見よ。

以上祖山學院文學部員の依頼に應じ、主として學院生を對象として、宗學上より觀たる教法、宇宙、人間、行法、成佛の五項に於ける私の現在の領解と安心を略述して諸子の參考に供した。本經祖判の依文を引くに吝なるは筆者寺務に多忙にして其の餘裕なきが爲と原稿に制限があるためである。願くは私の數種の拙著の外、特に大崎學報第七十八號所載の三學六度進退論、同七十九號の立正主義信解行證廣略要概説（本化行學論）を参照されたい。但し本稿と多少の相違ある点は、改めて會通又は何れかを訂正せねばならぬ。若夫れ宗門當面の問題たる「皇道佛教行道會」の教義信條に對する批判は材料集り次第私見を何等かの方法によつて發表しやう。